

平城宮跡・平城京跡の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

平城宮跡発掘調査部では、1986年度に、平城宮跡内では推定第一次朝堂院南門東側、推定第二次朝堂院、内裏東方東大溝など16件（宮北方遺跡を含む）、平城京域内では左京三条二坊七坪、左京四条二坊一坪、右京八条一坊十四坪などの9件、それに頭塔、法華寺、西大寺など寺院9件、計34件の調査を実施した。以下、主要な調査の概要を報告する。

1. 平城宮跡の調査

推定第一次朝堂院南門東側（第176次）の調査 第一次朝堂院については、過去7回の調査によって、朝庭部分を除いた区画の東半部のほぼ全域の遺構を検出してきた。このうち東面の区画施設については変遷の要点が判明しているが、南面については、調査場所によって遺構の残りが悪く、細部の状況が異なるために、遺構の性格や区画の変遷に関して一致した見解が得られていない。そこで、懸案の問題を解決するため、南面東半部の未調査部分を調査した。

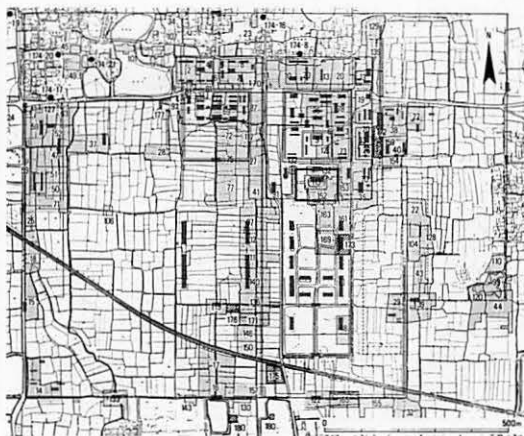
今回の調査で明らかとなった主な点は次の通りである。1. 東西方向の布掘状掘込地業 SX9199は、掘立柱塀 SA9201と直接関係しない可能性が高い。2. 掘立柱塀 SA9201は2時期の柱掘形の重複はなく、1時期だけである。3. SA9201のすぐ南に、それよりも新しい東西塀 SA12950の確認した。これは、東面の区画施設 SA5550Bと遺構の状況が共通している。

以上の事実と、従来の調査成果を合わせて、第一次朝堂院の区画施設の変遷を概観する。

A 期 第一次朝堂院の区画施設を造営する以前の時期。基幹南北排水路 SD3765を朝堂院中軸線の東約102mの位置に掘削する。中軸線の東約120mに南北方向の柱掘形列 SA8410を掘り下げるが、柱を立てずに埋め戻す。南面では掘込事業 SX9199を東西約72mの間にわたって掘り下げるが、これも建造物の地下地業として完成することなく、造営途中で埋め戻す。

B 期 第一次朝堂院の区画施設として、掘立柱塀を造る時期。朝堂院の規模は、東西約214m・600大尺、南北約284m・800大尺である。B₁・B₂の2小期に区分できる。

B₁ 期 南面東半を SA9201、西半を SA9202で限る。両者の間は約15mあいており、この段階では門はない。SA9201は37間あり柱間寸法が約9尺である。東面は SA5550A で画す。SA5550A は96間あり柱間寸法が約10尺である。これらの塀は、高さ5m前後で基壇があり、柱と柱の間には土壁を設け、屋根に瓦を葺いた大規模な施設であった。基幹排水路として南北溝 SD3715



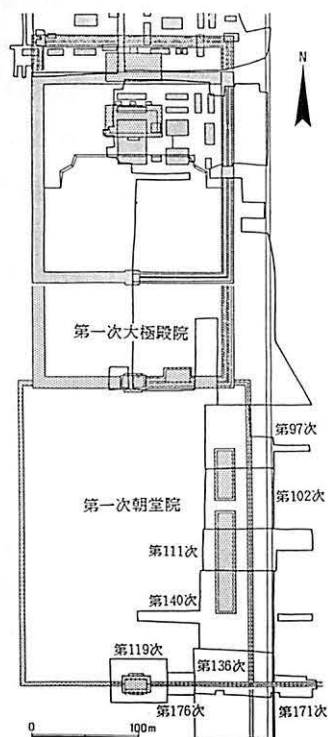
平城宮跡発掘調査位置図

を、SA5550A の東約17.5m・50大尺の位置に造る。

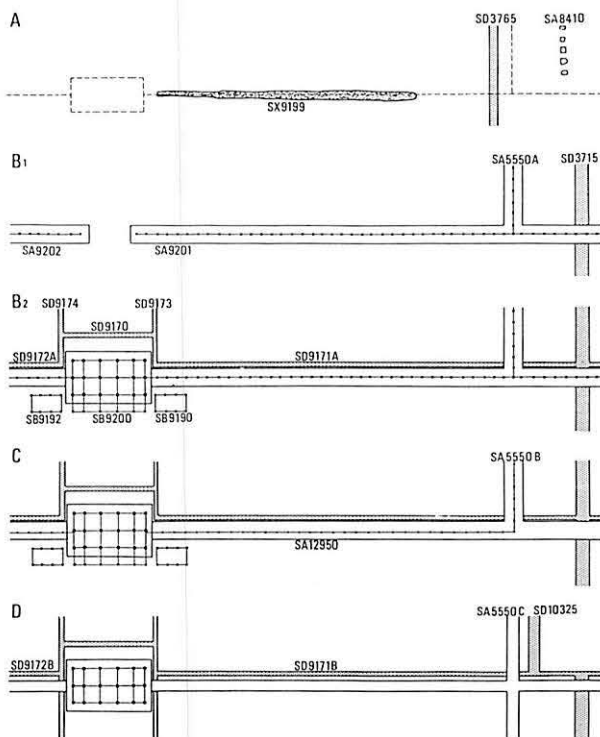
B₂ 期 SA9201・9202の間に朝堂院南門 SB9200を造営する。朝堂院内部には四棟の朝堂を建造し、第一次朝堂院が完成する。SB9200の建設の際に、SA9201・9202の中寄り各2間分を取り壊して門基壇の掘込地業を行っている。門は桁行5間・梁行2間で柱間寸法は桁行中央3間が15尺等間、両脇間が10尺、梁行が各15尺の切妻造りとみられる。門の南側にはいわゆる土廂がつく。廂の出は15尺で門基壇の外（南）側に廂を受ける柱列がある。この廂の柱列と南側柱筋を揃えて、土廂の東西に、桁行3間・梁行1間の東西棟掘立柱建物各1棟（SB9190・SB9192）を配置する。門とSA9201・9202の北側に雨落溝を造り（SD9170・9171A・9172A）、門の東西では、朝堂院内部中央から、南下した2条の南北溝（SD9173・9174）がSD9171A・9172Aと接続する。

C 期 朝堂院を区画する SA5550A・9201を撤去し、SA5550B・12950に改作する時期。SA5550B・12950とも柱は直径20cmほどの細さであるのに柱間が3mと広いので、SA5550A・9201のような壮大な扉ではなく、仮設的な板扉であったと考えられる。

D 期 朝堂院の区画施設を東面・南面とも築地塀に造替える。SB9200の南廂および門の南側東西のSB9190・9192を撤去する。門の東西の溝 SD9173・9174が南に直流し、築地塀北側の溝 SD9171・9172を約0.7m北に移す。



第一次朝堂院地区調査位置図



第一次朝堂院南面区画施設変遷図

推定第二次朝堂院地区（第173次）の調査 推定第二次朝堂院地区では、これまでに第161・163・169次の調査を実施し、第161次では東第一堂とその下層の掘立柱建物、第163・169次では朝庭部分で3時期の大嘗宮を検出した。今回の調査は、東第二堂および下層遺構の規模と構造を明らかにする目的で行った。前期難波宮や藤原宮では、第一堂と第二堂との間には構造の面で相違があるが、第三堂以南の朝堂は第二堂と基本的な違いがない。平城宮も同様と考えれば、第二堂の調査によって第三堂以南の朝堂についての見通しが立てられる。

今回の調査で以下の点が明らかになった。1. 東第二堂 SB12920の規模と構造が判明した。瓦葺き礎石建ちで基壇があり、9間×4間の四面廂付南北棟建物である。柱間は、身舎が桁行・梁行とも13尺（3.9m）等間、廂の出が10尺であり、桁行総長が111尺（33m）、梁行総長が46尺（13.5m）となる。基壇規模は南北36.5m、東西17.5mで、基壇の出は約6尺である。西面に3ヶ所、北面に1ヶ所の階段が付く。従来、第二堂は切妻の建物と考えられていたが、入母屋ないし寄棟造建物となる。2. 東第二堂の下層で掘立柱建物 SB12930を検出した。12間×3間の西廂付南北棟建物で基壇がある。柱間は、桁行・梁行とも10尺（3m）等間で、桁行総長が120尺（36m）、梁行総長が30尺（9m）となる。基壇は現存部で高さ45cmあるが、規模は不明である。この建物は、東第一堂下層建物 SB11740と同時期である。3. SB11740とSB12930の位置関係、および東第一堂と東第二堂の位置関係は以下の通りである。すなわち、SB11740の東側柱列とSB12930の西入側柱列とが筋を揃え、両建物の南妻は200尺（60m）離れる。SB12930の身舎中軸線は朝堂院下層区画中心線から225尺（67m）東にあり、この距離は中心線から東面の堀までの距離300尺の4分の3にあたる。東第一堂と東第二堂の南妻位置はそれぞれの下層建物と一致する。東第一堂と東第二堂は柱筋を揃え、身舎中軸線がSB12930の身舎中軸線と一致する。4. 第169次で検出したB・C期大嘗宮の南辺と東第二堂南妻が筋を揃える。A期大嘗宮の南辺はB・C期の約30尺（9m）北に位置する。

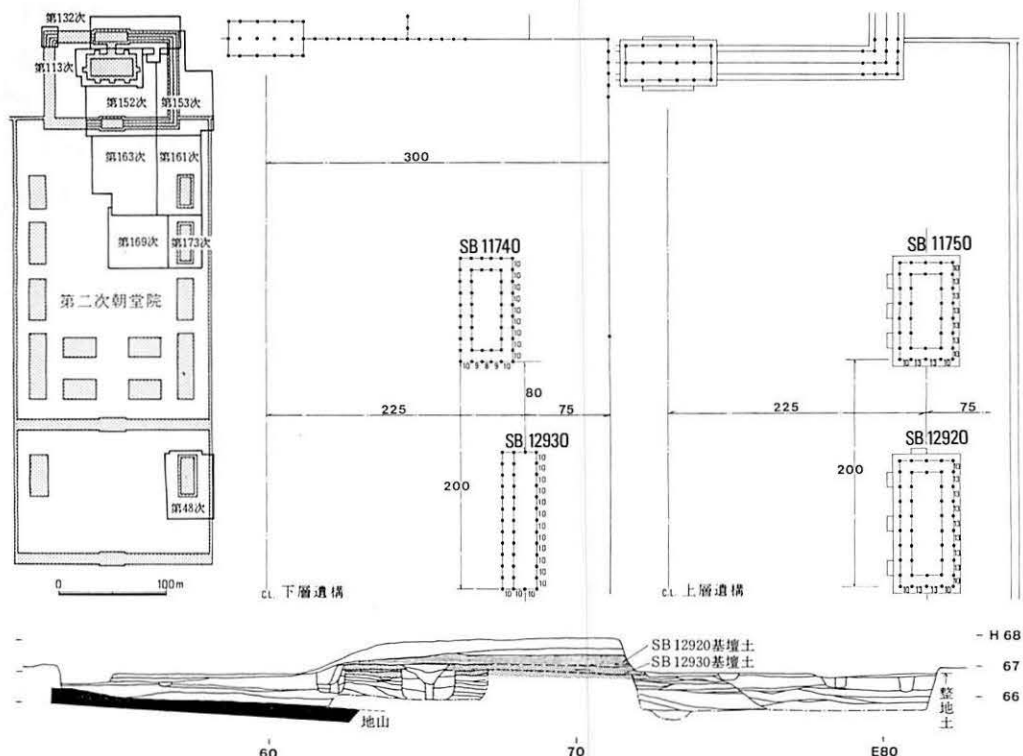
この地域の調査の進行に伴って問題となっているのは、朝堂の下層で検出している掘立柱殿舎の性格である。これについては、東宮説が出されていたが、以上の事実と従来の調査成果を合わせると、下層遺構も「朝堂」であったと考えられる。根拠は以下の通りである。1. 内裏・第二次大極殿院・第二次朝堂院の全域に、上層の建物配置に類似した下層建物群がある。それらはすべて掘立柱建物で、一体のものとして計画されたとみなせる。2. 下層遺構の朝庭部分には、大嘗宮のような仮設物を除けば常設の建物がなく、やはり庭として機能を果していた。3. 東第一堂のみならず東第二堂の下層にも建物があり、これら下層建物の位置・規模をほぼ踏襲して上層の朝堂が建てられている。したがって、第三堂以南の朝堂についても下層建物が存在する可能性が高くなり、下層建物が合計12棟あったと想定できる。SB11740がSB12930より内側にあり構造が異なるのは、前期難波宮や藤原宮の朝堂にみられる第一堂と第二堂との違いと同様である。

このように下層遺構を朝堂と考えると、以下の点が問題となる。

1. 下層朝堂の存続年代。上限は平城遷都当初まで遡る可能性がある。文献史料ではすでに和銅年間から朝堂の記載があるのに対し、第一次朝堂院の成立が発掘調査の成果から霊亀までしか遡らず、これを和銅の朝堂に当てることはできない。したがって、第二次朝堂院下層朝堂が和銅の朝堂に当たる可能性がある。下限は上層朝堂の建設時となるが、これが聖武天皇即位のころか、平城遷都後かは議論が分かれており、現状では後者の可能性が強まっている。

2. 平城宮中央の第一次朝堂院と第二次朝堂院との関係。第二次朝堂院下層朝堂がすでに奈良時代前半から存在しているから、二つの地区の朝堂院は終始並存していたことになる。第171次調査では、奈良時代の前・後半ともに、朝堂の南辺に二つの朝堂をつなぐ塀があることを確認しており、すでに朝堂並存の徴証が見られていたが、今回の調査によってその点がさらに補強された。朝堂並存の意味については、第一次の朝堂が四堂で、第二次のそれが十二堂であることを重視すれば、平安宮の豊楽院・朝堂院と同様に機能の分化と考えることができよう。第一次朝堂院では主として儀式・宴会が、第二次朝堂院では朝政が行われる、といった使い分けの端緒となったのではなかろうか。

3. 第二次朝堂院下層朝堂の正殿、つまり第二次大極殿下層建物は何か。大極殿に類似する機能を持つ「大安殿」に比定するのか、さらに別の殿舎か、いまのところ断案はないが、いずれにせよ朝堂が付属すべき大殿であることを前提に今後の検討を進めるべきであろう。



上 第二次朝堂院地区調査位置図・変遷図 下 東第二堂基壇東西方向断面図

内裏東方東大溝地区（第172次）の調査 調査区は内裏東外郭と内裏東方官衙とに挟まれた、東大溝 SD2700を中心とする地区で、北は第21次、東は第38・40・159次、南は第154次、西は第26・33・70次調査区に接する。検出した主要な遺構は、掘立柱建物22棟、門1棟、築地堀2条、掘立柱堀27条、溝10条である。以下、今回あらたにその存在が判明した内裏東外郭東接官衙、東大溝、内裏東方官衙の順で、遺構の状況を述べる。

内裏東外郭東接官衙 この官衙域は、東西を東大溝 SD2700と内裏東外郭東面築地 SA705で限られ、南は第154次調査で検出した内裏内郭からの排水溝 SD4240で限られる。東西幅は当初約16m、のちに東大溝の堆積土上に南北堀 SA12800が築かれて約17mに広がるが、平城宮の官衙区画としてはきわめて幅の狭い特異な形態である。遺構は大きく4時期に区分でき、A期が奈良時代前半、B期が平城遷都以降、C期が天平宝字年間以降、D期が奈良時代末である。A～C期には、官衙域を大きく南北2区に分け、それぞれに建物を1～4棟配す。C期が最も整備された時期で、周囲を堀で囲んだ中をさらに堀で南北二区に分け、建物を整然と配置する。北面区画施設は検出していないが、今調査区のすぐ北側に東面堀 SA12800にとりつく東西堀があって、内裏東外郭の東門 SB6820の南側に達していたと推定できる。

東大溝 SD2700 平城宮東半部の基幹排水路で120mにわたり検出した。堆積層は大きく6層あり、これを手がかりに溝の変遷を概観する。当初は素掘りで、溝幅は5～6m、深さ1.6～1.8m。天平年間前後に東岸を西に寄せて人頭大の玉石（三笠山安山岩）を積んだ石垣を構築した。この時期の溝幅は4～5m、深さ1.2～1.4m。西岸は当初から石垣が作られず、杭としがらみで護岸していたが、早い時期に崩壊し、崩壊土を石垣底部まで浚渫したとみられる。天平宝字年間前後に、溝の西半を瓦を多量に含む③層で埋立て護岸とした。この時期は溝幅3～3.5m、深さ1m。④層の堆積で溝がほぼ埋まった後の奈良時代末に東岸沿いに幅約0.6～0.8m、深さ0.3～0.4mの細溝が掘られ、⑤層が堆積した。⑥層は溝の最終末期の堆積である。

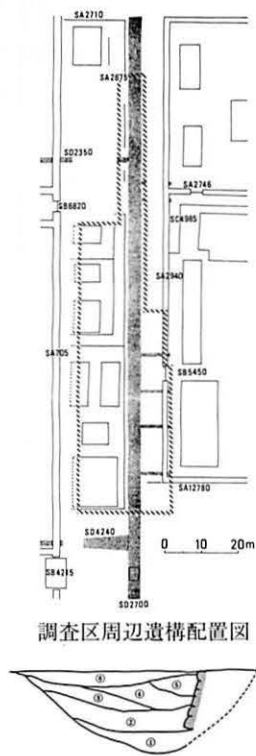
内裏東方官衙 調査区東端で官衙の西面・南面築地の一部と西門、東大溝に注ぐ暗渠を検出した。西面築地 SA2940の下層には掘立柱南北堀がある。第154次調査の知見と合わせれば、南北堀はSA2940南端で東へ曲がり、南面築地 SA12780の下層につながるとみられる。

遺物 SD2700から大量の木製品（主要な物を28頁に図示）・金属製品（同左）・土器・瓦埴類・木簡等が出土した。木製品では黒漆塗把頭や金銀蒔絵製品（本文57頁で詳述）、金属製品では銅製人形・海老錠（鏢子）・和同銭バリ銭・铸竿、土器では新羅製陶質土器、瓦埴類では「獻軍器□」墨書埴・飛雲文軒丸瓦・蓮華文鬼瓦などが注目される。木簡は4565点あり、造営関係・兵部省・中務省に関わるものが目立つ。墨書土器にも中務省・宮内省関係のものがある。

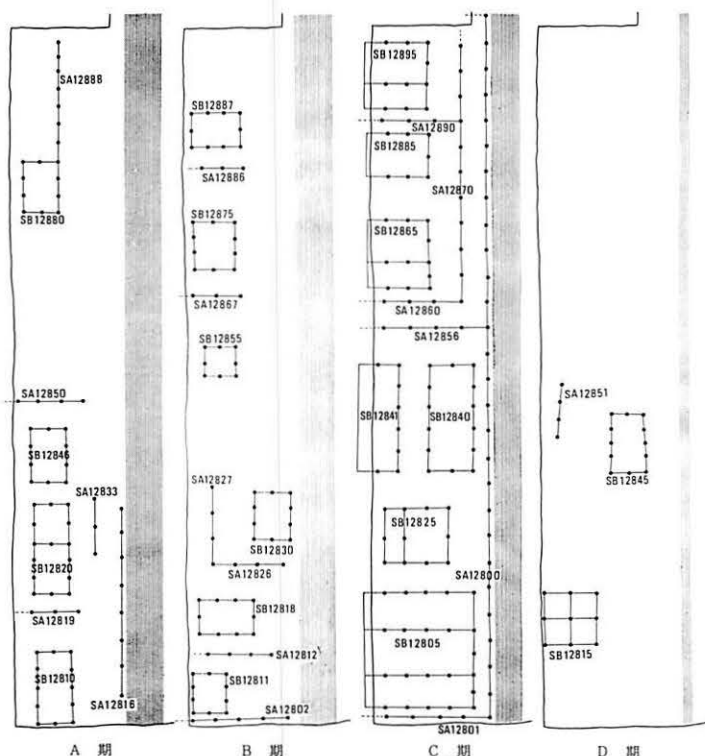
まとめ 内裏東外郭東接官衙は南北にきわめて細長く、通常の官衙配置とは異なる。この官衙の性格はどう考えるべきであろうか。2つの可能性をあげておく。1つはすぐ西に接する内裏東外郭内の官衙の付属施設であり、その官衙が手狭になったため、外郭外に付属施設を設けたという可能性である。もう1つは、この官衙が内裏外郭の門 SB4215と SB6820との間に位置

することから、内裏ないしはその外郭の門を守る兵の詰所的なものという可能性である。奈良時代には内裏に通じる（内門・閤門）は兵衛府が、内裏外郭の門（中門・宮門）は衛門府と衛士府が守衛していたと思われる。また神亀5（728）年8月には天皇の側近にいて警護にあたる中衛府が設置されている。今回出土の遺物にも「兵衛」「中衛」「馬従料」、五衛府の主典である「大志」、兵部省被官の「造兵司」などの記載のある木簡や、「献軍器□」の墨書埴、「中衛」「衛□」の墨書土器、黒漆塗把頭など武官の存在を物語るものがあり、付近に兵がいたことをうかがわせる。第13次調査で出土した木簡から、内裏北外郭内に兵衛の詰所があったと推定されていることも参考になる（『平城宮木簡一 解説』）。今の所いずれとも決められないが、今調査区の北側の調査によって、官衛の性格はより明らかになろう。

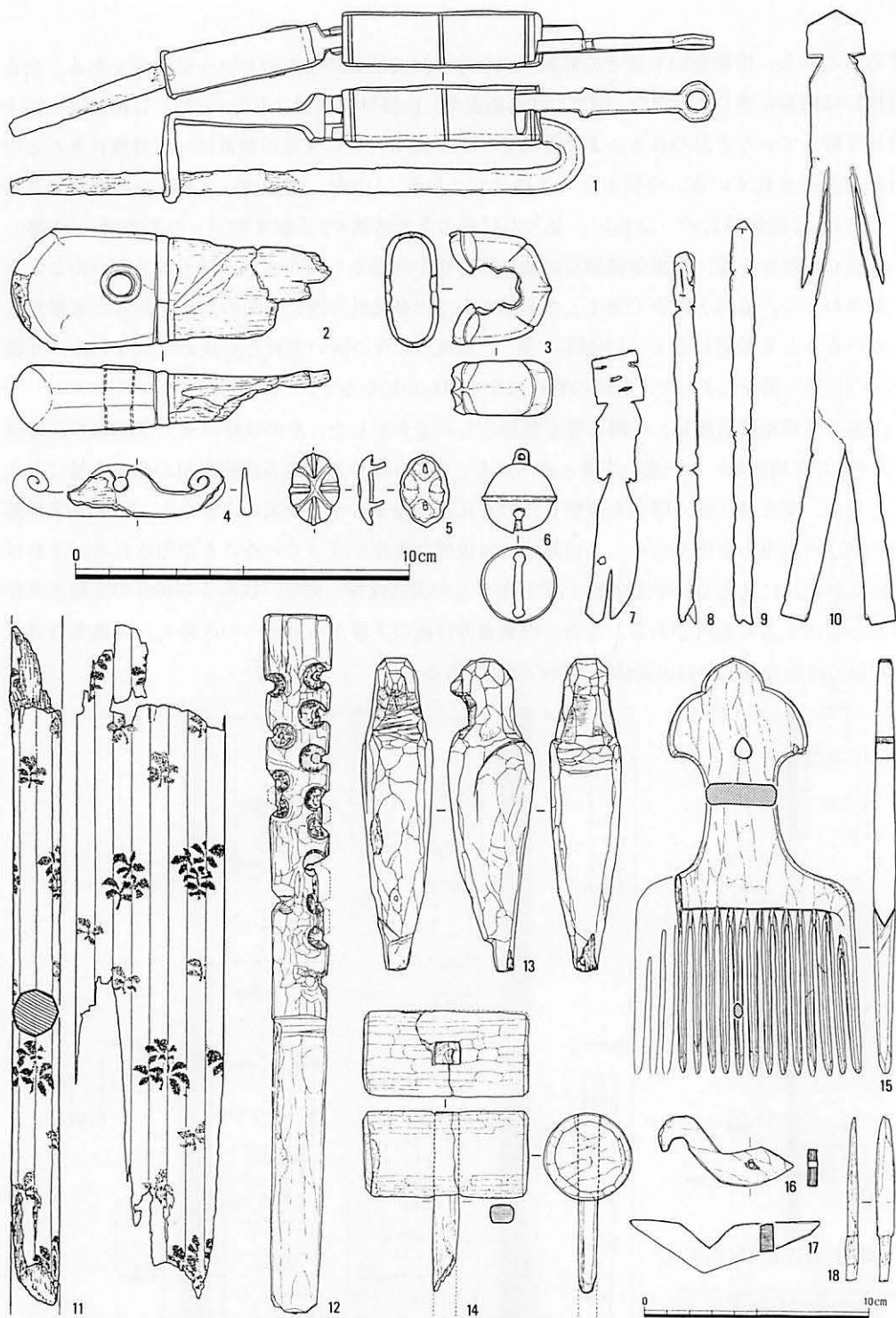
内裏東外郭東接官衛は、C期に最も整然とした姿を示した。その改修は東大溝③層の瓦護岸（天平宝字年間前後）と一連の作業とみられる。この③層からは東方官衛所用の瓦が大量に出土しており、東大溝に注ぐ暗渠を改修したのも瓦護岸後まもなくの頃であるなど、天平宝字年間前後には内裏東方官衛を含め、この地域は大規模な改作をうけていることが知られる。それは『続日本紀』に見える天平宝字元（757）年5月の大宮改修、あるいは同5年10月の平城宮改作などに関連する可能性がある。なお、内裏東方官衛の下層から上層への改修と、内裏東外郭東接官衛の時期変遷との対応関係は今後の課題である。



東大溝堆積層概念図



内裏東外郭東接官衛遺構変遷図



東大溝出土遺物(1~11:1/2,12~18:1/3)

1 鉄製鐔子 2 黒漆塗把頭 3 銅製鞘尾金具 4 燧鉄 5 金銅製飾鉋 6 銅鈴 7~10 銅製人形
11 金銀蒔絵製品 12 火きり臼 13 鳥形木製品 14 木槌 15 たて櫛 16・17 鳥形 18 鉄形

内裏北外郭北方（第174—8次）の調査 調査地は内裏北外郭に北接する所で、7.5m離れる東西溝2条を検出した。このうち南の溝 SD12972は内裏北外郭北面築地の北雨落溝もしくは、内裏北外郭に北接する官衙の南限施設に関わる遺構と考えられる。ちなみに、第139次調査で、内裏北外郭東北隅の築地が確認され、これから復原される官衙の南北規模は築地心々で約64mである。SD12972の溝心は南面築地 SA488（第10次調査）の心の北約70mに位置する。

佐紀池南辺（第177次）の調査 平城宮西北部にある佐紀池は、従来の調査で奈良時代の園池であったことを確認している。第92次調査では、池の南岸と新旧2時期の堰を伴う排水路を検出した。本調査区は第92次調査区の西隣りで、池岸の続きを確認する期待がもたれた。

調査の結果、奈良時代の遺構は4時期に区分できた。A期：奈良時代当初には2条の平行する東西溝と東西方向の溝状遺構 SD12971がある。B期：養老6年（722）頃に、東西溝を木屑と炭で厚く覆い、さらにその上に積土を置き、積土の南裾に東西溝を設ける。この積土が池の堤の一部であった可能性がある。C期：奈良時代中頃に、B期の積土の南側にさらに積土を置き、その南側に幅約2.6m、深さ約0.5mの東西溝 SD12965を設ける。この溝の位置は、宮西辺部の推定馬寮やその東方官衙の北面を限る築地の北側溝の約3m北になり、この地域における何らかの官衙の北限にかかわる溝と推定される。A期の SD12971はこの溝とほぼ同位置であり、この溝の前身遺構の可能性がある。D期：奈良時代末ないし平安時代初め頃、SD12965の廃絶後に南北廂付東西棟建物が建てられる。

今回の調査では、池岸を確認できなかったが、第92次調査区の池岸は排水路にむかって南に張り出すので、本調査区付近では池岸が幾分か北に後退するものと推定できる。B期の木屑・炭層は多量の削屑・檜皮を含み、この地域で養老6年頃に何らかの造営が行われたことを示す。この木屑・炭層および直上の積土からは多量の木簡・木製品・瓦・土器が出土した。

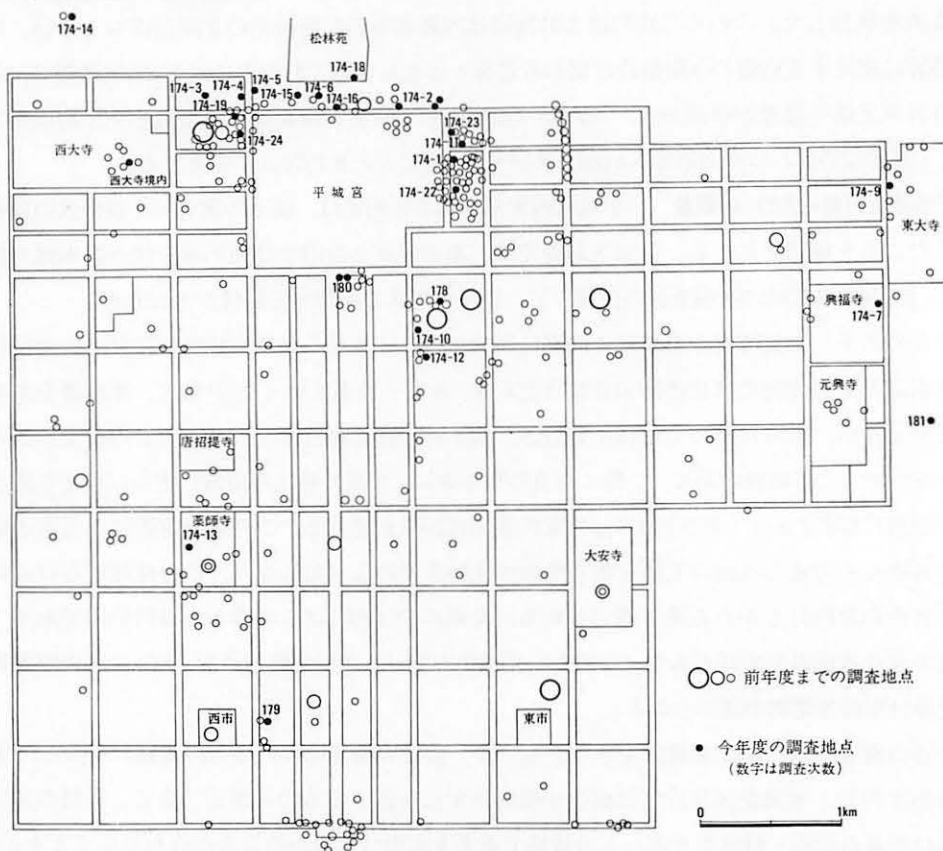
馬寮地区北方（第174—20次）の調査 伊福部門からのびる宮内東西道路をはさんで馬寮の北側の地域では、従来奈良時代の顕著な遺構を検出していない。今回、南北棟建物2棟と、区画にかかわる施設とみられる2条の東西溝を検出し、この地域の様相解明の手がかりを得た。

北面大垣（第174—16次）の調査 歌姫街道沿い西側で、第23次調査区のすぐ東にあたる。大垣築土基底部と北雨落溝、下層の掘立柱塀の柱掘形（一辺2m）を検出した。

平城宮北方遺跡（第174—2次）の調査Ⅰ 水上池南岸の護岸工事にともなう調査。調査区は宮北面大垣のすぐ北側で、大垣の塼地が想定された。また谷筋を堰きとめた奈良時代園池の存在も考えられ、池の堤と大垣の関係を知る上で重要な所である。調査の結果、現在水上池があるもともとの谷筋のうち北面大垣の近くは、奈良時代中頃には整地して利用していたことが判明し、池の東南隅調査区では国土方眼方位にのる東西溝を検出した。

平城宮北方遺跡（第174—5次）の調査Ⅱ 調査地は下吉堂池の西南、超昇寺城跡の西方にあたる。超昇寺城に関連した東西濠（復原濠幅10.6m、深さ4.2m以上）を検出し、城の範囲が従来の想定範囲を越えて西方に延びることが明らかとなった。（岩永省三）

2. 平城京跡の発掘調査



平城京発掘調査位置図

右京八条一坊十四坪（第179次）の調査 大和郡山市塵芥焼却場予定地の事前調査で、これまで大和郡山市教育委員会の調査も含め、計5回にわけて実施してきている。その結果、左京八条一坊十三・十四坪における宅地割の状況を知ることができ、また、金属製品や漆製品に関する工房がこの地域に存在することが明らかになった。今回の調査地は、過去5回の調査地に挟まれた地域で、十四坪のほぼ中心にあたる。検出した主な遺構は、奈良時代以前の斜行溝1条、奈良時代の掘立柱建物24棟、掘立柱塀5条、溝4条、井戸3基のほか、炭化物を含む多数の土城などで、奈良時代の遺構については、大きくA・Bの2時期に分けられる。

A期は調査区西端の道路遺構SF1650によって、坪が東西に区画されている。東に南廂付の東西棟建物SB1710があり、それを囲むように、建物、倉庫が建つ。これらの間には、円形、長円形の土城や炭化物を多く含む不整形な土城が多数ある。特に後者の土城からは、とりべ、^{ふいご} 鞆羽口、帯金具の未製品、留針など金属工房と関連する遺物の出土が目立つ。次のB期では、区画塀SA1300などによって十四坪は細分され、宅地として利用されている。なお、建物の建て替え等が認められるが、遺構変遷の各時期における細分については、現在検討が進められている。

に大別できる。

A 期 平城京造営以前、調査区の東半部には、数条の自然河川が北東から南西へ蛇行しながら流れている。最大のものは、幅 4～12m、深さ約 1.5m で、現在調査区の東を流れる菰川の旧流路である。この流路は、奈良時代の初めに一度掘り直され、中頃には埋め立てられた。

B 期 七坪と二坪との間に坪境小路がなく、両坪が一体として使われていた時期。七坪西半には、掘立柱塀をめぐらした区画があり建物が並ぶが、東半は、掘り直した河川があり、空地が目立つ。B 期は、さらに 3 小期の変遷をたどる。

B₁ 期は、南北塀 SA50 と東西塀 SA95 に囲まれた区画がある。区画のなかには、二坪との境から西にかけて、南北に廂をもつ東西棟建物 SB100 が建ち、これと SA50 のほぼ中間に位置する南北塀 SA70 でさらに区切られた東方には、2 棟の東西棟建物 SB56・62 がある。東西塀 SA95 の北に接して、南北に側溝をもつ東西道路 SF77 が通る。これらの区画の外には、SA50 の東に接して東西棟総柱建物 SB45 がある。南北溝 SD106 は、東二坊坊間路の西側溝であり、平安時代の初頭まで存続していた。

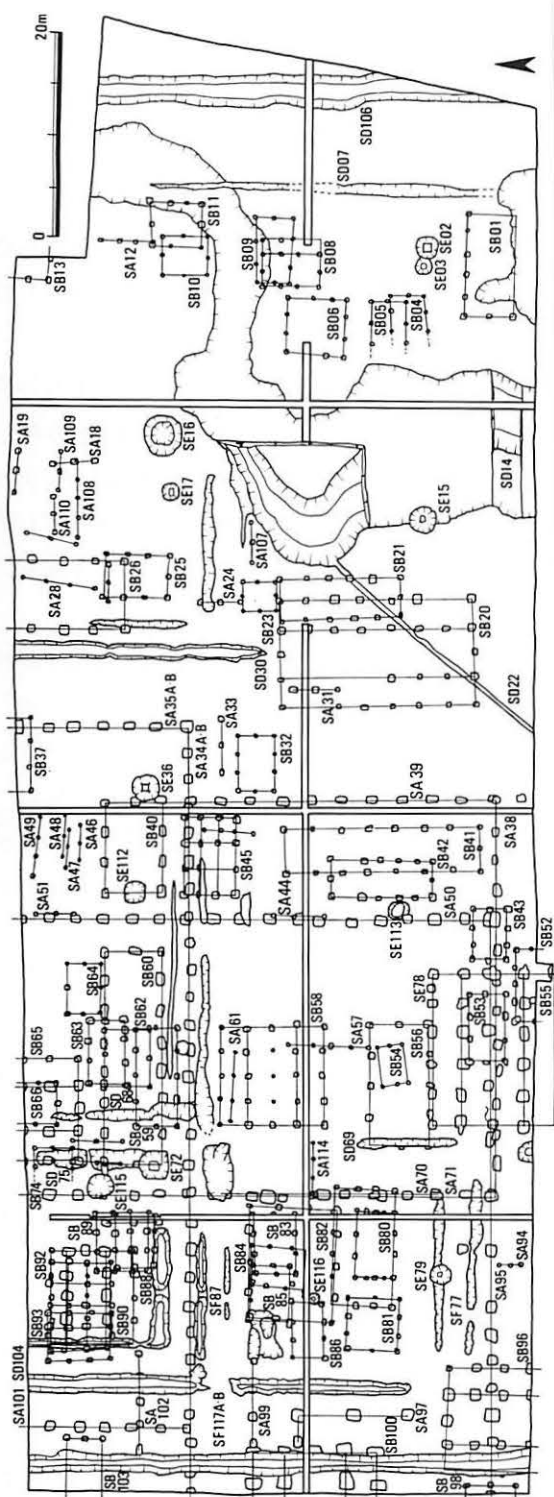
B₂ 期は、SB100 を除いて、建物や塀は造り替えられる。SB100 の東方に SA70 の位置を踏襲した南北塀 SA71 と東西塀 SA38、南北塀 SA39 で囲まれる区画ができる。このなかに、東西棟建物 SB40・60 があり、SB40 の東妻には SA39 が取り付く。

B₃ 期には、区画が北へ移動する。南北塀 SA35、東西塀 SA34 があり、SA34 には、南北塀 SA101 が取り付く。SA35 は、条坊計画による七坪の東西中軸線上、SA101 は二坪・七坪の境界線上にあり、計画的に配置されている。区画のなかの東西棟建物 SB90 は南北に廂をもち、身舎は床張りである。区画の外は、東方に南北棟建物 SB21・26 などが建つ。

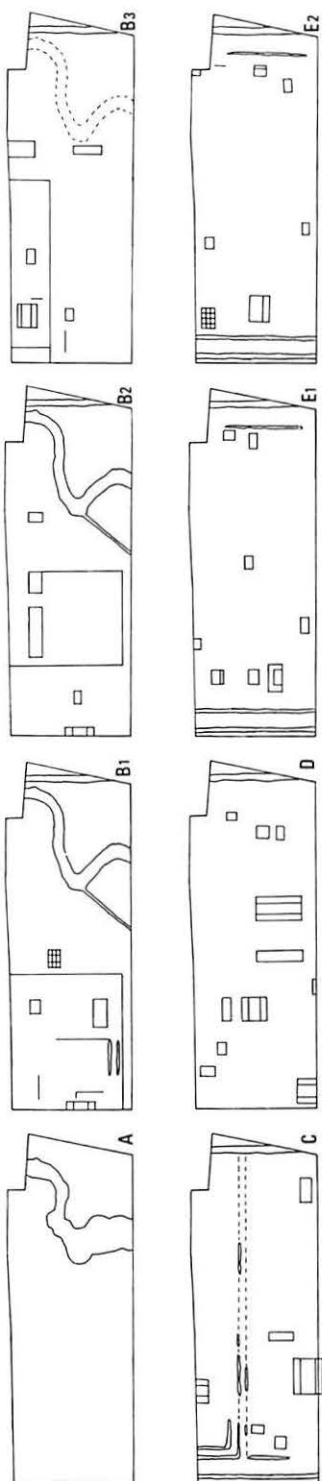
C 期 七坪と二坪の間に南北道路 SF117A が設けられ、様相が一変する。七坪は、東西道路 SF87 により、さらに南北に二分される。北半は、東西に廂をもつ南北棟建物 SB65 1 棟のみであるが、南半には、南北に廂をもつ東西棟建物 SB55 のほか、掘立柱建物 SB01・42・81・84 がある。なお SF117A の東側溝は、現状では 2 ケ所で途切れている。これが当初のものか、後世の削平によるものかは、そのうちの 1 ケ所が SF87 との交点にあたるため、慎重な検討を要する。

D 期 南北道路 SF117A が廃され、再び七坪と二坪が一体として利用される。二坪・七坪の境界線上には東西に廂をもつ南北棟建物 SB96 があり、七坪の西から 1/4 のところには、東西棟建物 SB58・59 が南北に並び、SB58 は南北に廂をもつ。坪の東西二等分線を挟んで東には東西に廂をもつ南北棟建物 SB20、西には東西棟建物 SB41 が建つ。また、この時期になって、それまでは、ほとんど利用されることのなかった菰川旧流路の一带にも、小規模ながら建物が建てられるようになる。

E 期 七坪と二坪との間に再び南北道路 SF117B が設けられる。坪のなかを細分する施設は検出されていないが、小規模な建物が SF117B や坊間路沿いに散在する。E 期は、さらに 2 小期に区分される。



左京三条二坊七坪発掘調査遺構図・変遷図



E₁期は、SF117Bの東に、東西棟建物SB80・83・89、坊間路沿いに掘立柱建物SB09・11などがなる。その中間には東西棟建物SB32があるだけで、顕著な遺構は認められない。南北溝SD07は、坊間路西側溝SD106の西30尺に位置し、何らかの区画を示すものであろう。

E₂期は、SF117Bの東に、東西棟総柱建物SB92、南に廂をもつ東西棟建物SB82、坊間路沿いに掘立柱建物SB04・08・13、それらの間に小規模な掘立柱建物SB43・64が建つ。

井戸 14基のうち、井戸枳等の遺存していたものは8基である。このなかで、縦板を用いた例が4基(SE02・15・36・78)、底板をぬいた円形曲物を据えた例が3基(SE67・79・116)で、横板蒸籠組はSE72の1基である。残り6基のうち2基(SE17・115)は、掘削途中で埋め戻しており、他の4基(SE03・16・112・113)は、井戸枳が抜き取られ遺存していない。これら14基の井戸のうち遺構の重複関係などから掘削時期を推定できるのは、SE36・72・115のB₃期、SE79のB₁期程度しかない。一方、廃絶時期も、井戸内の出土遺物からSE15・16・79などが奈良時代末と推定できるにすぎない。また、井戸の配置をみると、南北に分かれて、それぞれ東西方向に並んでいる。遺構の変遷や坪内の分割、区画等の土地利用状況を知る上での手懸りになる。

まとめ 今回の調査では、平城京造営当初から2町以上を占める施設の存在したことが確認され、また、七坪と二坪とが一体に利用された時期と道路で区画される時期のあることが明らかになった。しかし、この道路が坪境小路であるか、敷地内の道路の一つであるかは、慎重な検討を要する。継続して行われている七坪北半の第184次調査において、南北堀SA35・50は、八坪との境界を越えて、さらに北に続くことが判明しており、4町規模の施設の存在が明らかになっている。これが大規模な宅地なのか、あるいは公的性格をもつ施設かは、今後の大きな課題である。

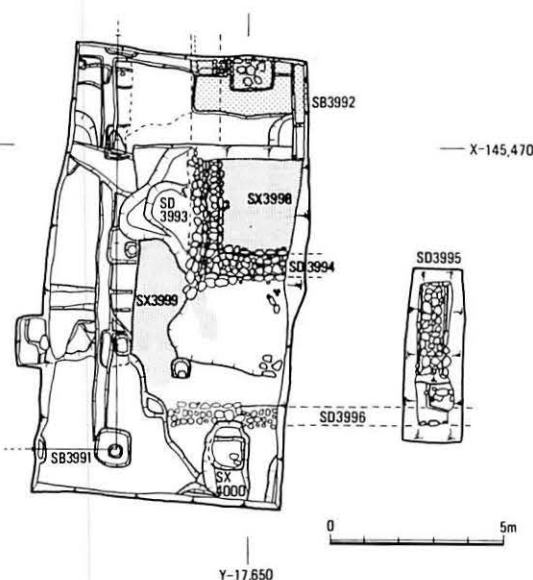
3. 平城京内寺院の調査

本年度は、法華寺、興福寺、薬師寺、東大寺、秋篠寺、西大寺の寺域内での事前調査を実施した。ここでは、法華寺と西大寺の調査の概要について記す。

法華寺(第174-22次)の調査 公民館建設に伴う調査で、現在の法華寺南門の東南にあたる。南門の南では過去2回の調査によって、奈良時代の金堂跡が確認されており、今回の調査地はその真東にあたる。調査の結果、奈良時代の法華寺造営に伴う遺構と造営前の遺構を検出した。

法華寺造営前の遺構 検出した遺構には、掘立柱建物1棟、礫敷と井戸周囲の排水施設である石組溝がある。発掘区東北部で検出した礫敷SX3998は、南西部分の状況を知ることができた。礫敷は地山を1mほど掘り下げた面にあり、地山面との段差には、人頭大の河原石を3～4個積み上げて擁壁としている。擁壁と礫敷との間には、石組の南北溝SD3993、東西溝SD3994が巡る。石組溝は底に偏平な石を敷き、礫敷側には細長い石を置いて側石とし、反対側はそのまま擁壁の石積につながる。一段高くなった擁壁の西側には礫が敷かれ(SX3999)、南側でも所々

に礎敷の跡がみられる。一方、東発掘区では、SD3993、SD3994の水を南へ流す南北石組溝 SD3995を検出した。この石組溝も底に偏平な石を敷き、東西に側石を立てている。これらの遺構は、発掘区の東北に想定される井戸本体に伴う施設である。なお、井戸を囲むと推定される石組溝の位置を知るため電気探査を行ったところ、石組溝で囲まれる範囲は南北16mであると、推定できた。一方東西幅については、東発掘区で検出した石組溝 SD3995が、井戸東の溝の延長とすると7m、井戸の中軸線上とすると14mとなる。また、礎敷 SX3999の西には南北棟建物 SB3991が建つ。発掘区東南隅の柱掘形 SX4000は、SB3991に取り付く扉、または、別の掘立柱建物の西北隅柱と考えられる。以上の遺構は、法華寺造営に伴って廃絶したのであるが、藤原不比等邸の時期まで遡るか否かは決定しえなかった。



法華寺旧境内発掘調査遺構図

法華寺造営に伴う遺構 検出した遺構は礎石建物1棟、石組溝1条で、法華寺造営前の遺構を埋め、整地した後に造られている。礎石建物 SB3992は、西南部を検出したもので、版築による基壇を伴う。版築直下には地固めのため厚く礎を敷いている。礎石は残っていなかったが、礎石据付け掘形の底に人頭大の石を数個置き根石としている。なお、雨落溝、基壇化粧の痕跡は認められない。石組溝 SD3996は、底に偏平な河原石を敷き側石を立てた東西溝で、位置的にみて金堂に取り付く回廊の側溝と考えられる。ただし、回廊の基壇あるいは柱跡は検出していないので、回廊の南北いずれの側溝かは不明である。

西大寺の調査 西大寺の防災工事に伴う事前調査で、貯水槽から四王堂に至る区間と堂周辺の配管予定地について実施した。また四王堂周辺では、配管位置を決定するために、本来の基壇を確認する調査も行った。配管予定地では、西大寺造営以前の平城京の宅地に属す建物、中・近世の井戸、池などのほか、四王堂に付属すると思われる建物の一部などを検出した。

四王堂基壇の調査 現四王堂の周囲において基壇規模確認の調査を行ったところ、当初の基壇規模を確認したにとどまらず、四王堂が大きく3時期の変遷をたどることが判明した。

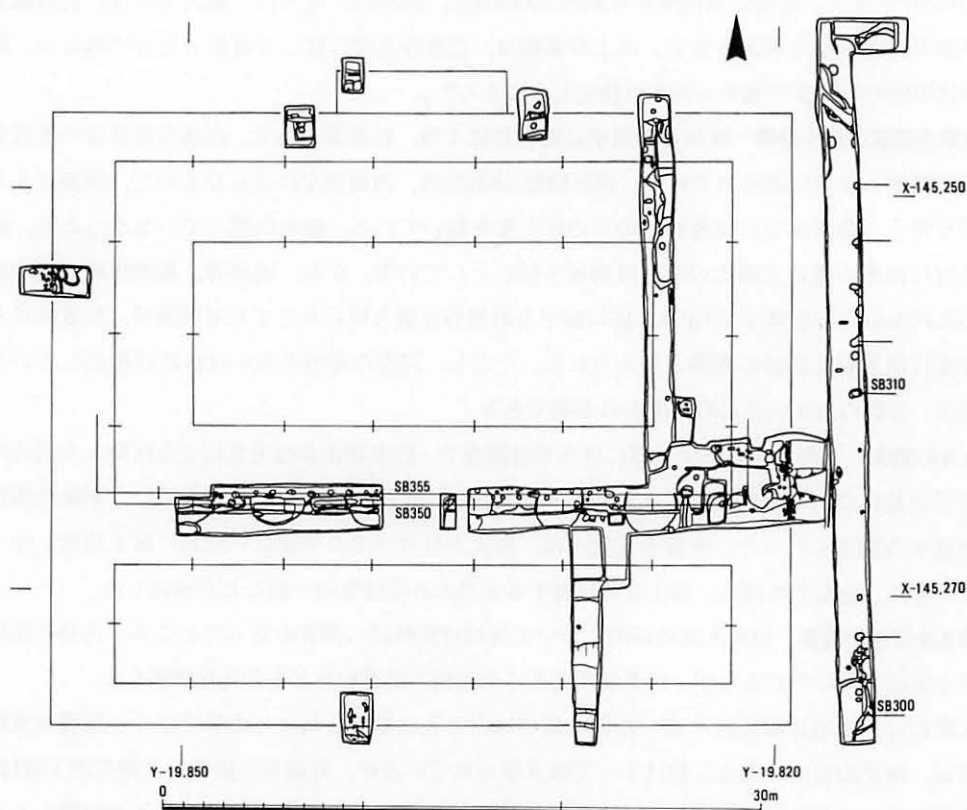
A期には、基壇は凝灰岩を使った壇上積で地山の上に整地した後、版築で築く。規模は東西約37m、南北約31mである。柱はすべて抜き取られているが、断割りの結果、当初の四王堂は、整地後に柱穴を掘り、柱を立ててから版築で基壇を築いた掘立柱建物であることが判明した。

『西大寺資財帳』によれば、四王堂は桧皮葺の双堂形式である。従って今回検出した柱抜き取

り穴は、北側にある正堂の南側柱列と考えられ、正堂は5間2間の身舎に四面廂のつく東西棟建物と推定される。

B期は整地を行うとともに、A期基壇の南半を削って段をもつ基壇に造り直し、礎石建物にする。基壇端には瓦と石を用いている。北側の基壇の南辺で礎石列と礎石の間をつなぐ縁束石と考えられる石列を検出した。B期も双堂形式とすると、礎石の大きさなどから、正堂と礼堂が屋根続きとなる形式が想定でき、礎石列と縁束石列は両堂の軒下となる中の間に立つ柱を受けたのであろう。基壇化粧に用いられた瓦は火を受けており、また、基壇崩壊土の下には焼土・炭層があり、この建物が火災を蒙ったことがわかる。基壇化粧の瓦や出土した土器から、B期の建物は、9世紀中頃に造営が始まり、10世紀中頃に火災で廃絶したことが判明した。

C期に属する建物関連の遺構は検出していないが、基壇はB期の南半の段を埋め立て、東西にも拡幅し、東西幅は40mほどになる。現四王堂の外周に大量に土器を含む層が広がることから、現四王堂の位置に、規模もそれほど変わらない建物が建っていたと考えられる。B期の基壇土や遺構面に広がる堆積層出土の土器により、C期の上限は11世紀頃と考えられ、11世紀初頭、輔静が西大寺別当に就任した後に四王堂が再建されたことがわかる。(小林謙一)



西大寺四王堂基壇と周辺の遺構図

1986年度 平城宮跡発掘調査部調査一覧

調査地区	遺跡・調査次数	調査期間	調査面積 (m ²)	備考
6AAD, 6AAC	平城宮 第172次	86. 3. 24~11.20	1,900	内裏東方東大溝
6AAT	平城宮 第173次	86. 7. 1~ 9.23	1,400	推定第二次朝堂院
6BFK	平城京 第174-1次	86. 4.18	16	法華寺旧境内
6AAA, 6ALA-M	平城宮 第174-2次	86. 4.22~ 5. 1	95	平城宮北方遺跡
6AGA	平城京 第174-3次	86. 5. 7	34	右京一条北辺二坊
6AGU	平城宮 第174-4次	86. 5.13	6	平城宮北方遺跡
6AGU	平城宮 第174-5次	86. 5.13~ 5.16	17	〃
6ABN	平城宮 第174-6次	86. 5.15~ 5.28	220	〃
6BKF	平城京 第174-7次	86. 5.19~ 7.29	950	興福寺旧境内
6AAN	平城宮 第174-8次	86. 6. 9~ 6.11	14.5	内裏北外郭北方
6BTD	平城京 第174-9次	86. 6.24~ 6.26	21	東大寺旧境内
6AFI-N・O	平城京 第174-10次	86. 7. 7~ 7.25	490	左京三条二坊三・四坪
6BFK	平城京 第174-11次	86. 7.10~ 7.11	9.9	左京一条二坊十四坪
6AFM	平城京 第174-12次	86. 7.19~ 9. 6	1,070	左京四条二坊一坪
6BYS-H	平城京 第174-13次	86. 8. 7~ 8.12	10	薬師寺旧境内
6BAK	平城京 第174-14次	86. 9. 9	7.5	秋篠寺旧境内
6ACA	平城宮 第174-15次	86.10. 7~10.13	16	平城宮北方遺跡
6ABA-K	平城宮 第174-16次	86.11.11~11.14	21	平城宮北面大垣
6ADB-N	平城宮 第174-17次	86.11.13~11.14	10	馬寮地区北方
6AFV	平城宮 第174-18次	86.11.25~11.27	6.5	平城宮北方遺跡
6AGA-G	平城京 第174-19次	86.12. 3~12. 5	5	右京一条二坊
6ADB-F	平城宮 第174-20次	86.12. 9~12.12	75	馬寮地区北方
6ACO-A	平城宮 第174-21次	86.12.17~12.18	10	〃
6BFK	平城京 第174-22次	87. 1. 7~ 1.27	95	法華寺旧境内
6AFC	平城京 第174-23次	87. 1.30	4.6	左京一条二坊十坪
6AGA	平城京 第174-24次	87. 3. 2~ 3. 5	43.2	右京一条二坊三坪
6ABL-A・B	平城宮 第175次	86.11. 6~	2,000	推定第一次朝堂院南
6ABV-C 6ABW-C	平城宮 第176次	86. 8.12~12.18	600	推定第一次朝堂院南門東側
6ACC-D	平城宮 第177次	86.10.13~10.31	140	佐紀池南辺
6AFI-R	平城京 第178次	86. 9.30~87. 4.24	6,900	左京三条二坊七坪
6AII-O・P	平城京 第179次	86.11. 7~12.26	1,100	右京八条一坊十四坪
6ABL, 6ABY	平城京 第180次	87. 1.28~ 2.16	150	左京三条一坊一・八坪
6BZT-B	平城京 第181次	87. 2. 2~ 4.17	300	頭塔
6BSD	西大寺 次数外	86. 7.23~ 9.29	456.7	西大寺